

# 「柏崎の水」

## 久米の鉱泉

「刈羽郡案内」には、「久米村 塩泉あり 依て一名湯谷と云ひし由」とある。湯谷という言葉のとおり、むかし温泉が湧き出していた久米は、万治年間(1658~1661)頃まで「久米谷湯府村」といった。温泉が湧き出していたのは、現在の別侯コミュニティセンター北の山の麓である。現在は水温が下がってしまったが、硫黄分が含まれた鉱泉であることに変わりなく、湧出口には湯の花も見える。また、冬期間の消雪パイプ作動時には、硫黄分を含んだ地下水が使われるためかこの一帯に硫黄のにおいが漂う。

かつて、この鉱泉を使った「湯先の湯」という湯屋があった。これは発起人を中心にした有志2、3人が建物を建て開業したものであるが、その発起人は、大久保の医師とも、長野での商売で財を成した人とも言われる。昭和10年代を知る方によれば、昭和12、3年頃の湯先の湯は、若者がいつも集まる場所、という雰囲気だったとのことである。鉄砲を担いで山へ猟に行けば、獲物の鴨・雉などを持ち寄って酒食を共にしたという。だが、太平洋戦争が拡大し、若者が軍に入隊して村からいなくなるにつれ、湯先の湯は寂れていった。その後、戦時中は警防団 や在郷軍人会の集会などにも利用され、公民館のような役割を果たした。



湯先の湯のあった場所

湯先の湯の他にも、いくつかの場所から鉱泉は湧き出している。上条芋川の西の支流、その川沿いは細越に向かう道だったが、ここにも鉱泉の湧く場所があった。昭和40年代における土地改良工事のため今は埋まってしまったが、かつてそこは農作業を終えた人々が鉱泉で汗を洗い流し、一服する場所であった。

これらの鉱泉との関連は不明だが、「白川風土記」の久米村の項には「シブ湯」の説明がある。

村ノ地内ニ沸キ出ル泉ヲ云フ。

ヌルクシテ 其儘浴シ難シ。汲取テ

風呂ニワカシテ浴スレハ 能ク腫物ヲ治ス。

上記の説明のとおり、久米の鉱泉は腫物、あせも、まむしの毒などによく効いたという。孫の発疹を治すため、祖父が鉱泉を何度も汲んで持ち帰り、ついには完治させた、という実話も残っている。

余談だが、中越沖地震の被害による断水時、鉱泉を汲んで自宅で風呂を沸かして入った人もあったと聞く。鉱泉の存在と効用が地域の人々によく知られている証といえよう。

警防団...戦時中、空襲や災害から住民を守るために作られた団体

参考にした本

「越佐叢書 第17巻」今泉省三・真水淳 編(080 Iy 17)

「柏崎市伝説集」柏崎市教育委員会 編(388 K 輯)

「別侯コミュニティ創立10周年記念誌」

別侯コミュニティ振興協議会 編(379 ヲ)

